

コロナ禍における市民協働の実施について

ー学習資料展の新たな試みを例にー

山本 菜摘

はじめに

相模原市立博物館では、市民との協働で、様々な活動を行っている。その一つに「学習資料展」がある。

これは小・中学校の学習に役立ててもらうため、毎年11月から1月頃に開催している企画展である。学習資料展は、企画段階からボランティアの「市民学芸員」が参画し、展示を作り上げている点が大きな特徴となっている。

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、相模原市立博物館でも臨時休館を余儀なくされ、市民学芸員の活動も制限された。これにより例年のように展示に向けた準備会を開催することや、イベント等を行うことが難しくなり、学習資料展もコロナ禍に対応した形へ修正が試みられることとなった。

本稿では、このような困難な状況下での市民協働の実践を報告する。具体的には、コロナ禍で行われた学習資料展の企画から展示までの活動内容を細かく見ていくことになる。特に、新たな試みとして導入した「思い出エピソード」に焦点を合わせて、その成果を確認した上で、市民協働で展示を行う上での課題について述べることにする。

1. 問題の所在

令和2年11月25日・26日の2日間にわたって開催された第68回全国博物館大会は、横浜市開港記念会館を主会場に行われた。2日目の分科会では、分科会1「コロナ禍の下での博物館の取組」、分科会2「コロナ時代の新しい博物館像」として、3つある分科会の2つが新型コロナウイルス感染症の博物館への影響に関わるものであり、博物館にとってコロナ禍がいかに重大な問題をもたらしているのか、改めて思い知らされることとなった。

分科会では感染拡大防止による活動の制限、休館・休園中の活動、新型コロナウイルス関連資料の収集(注1)、オンライン化、経営に関する問題など、幾つもの実践や問題が提起された。(小野 2021、丹治 2021)

また、令和3年5月31日発行の『多摩のあゆみ』でも特集として「コロナ禍に向きあう博物館」が生まれ、

新型コロナウイルス感染症の影響下で博物館がどのような実践を行って、これに対応しているのか報告されている(佐藤 2021、青海 2021、仙仁 2021、菱沼 2021、斎藤 2021)。この特集では、コロナ禍でどのように体験イベントを行ったのか、ウェブの活用や展示資料のデジタル化をどう進めていくのか、そして、新型コロナウイルス感染症そのものを博物館はどう捉え展示に結び付けていったのかなど、今後の活動のヒントとなる事柄が多数示されている。

このように、新型コロナウイルス感染症は、博物館に様々な局面で問題をもたらしていることは、既に多くの関係者によって報告されているし、また、試行錯誤の中で様々な試みがなされてきている。

相模原市立博物館でも感染拡大を防止するために、人数制限やプラネタリウムの消毒の徹底など、様々な対策を行っている。ただ、本稿では博物館全体ではなく、特に感染防止対策と市民協働をどう両立させていくのかに焦点を当てて報告していきたいと思う。

そもそも相模原市立博物館では、ボランティアがいなければ企画展もイベントも現状のような人員体制のもとで実施することは難しい。それほどまでに市民学芸員の存在は、博物館にとって重要な支えとなっている。

コロナ禍で容易に人が集まらない中、どのように市民協働で展示を作り上げていくかは、現在進行形の大きな問題といえる。実際の現場では、博物館、市民学芸員、来館者という3者の関係の中で、どのように感染リスクを減らし、かつこれまでの活動に近付けることができるのかが焦点となる。

2. 市民学芸員

市民学芸員は、平成18年度に募集した展示協力ボランティアを母体に生まれた、相模原市立博物館の市民ボランティアである。年齢層は20代から80代ではあるものの、構成するメンバーは退職後の世代が多い。

特定の分野に限らずに館の教育普及活動全般に係わる活動をしており、当館主催事業への協力など個人の単位の活動もあるが、多くが有志のチームでの活動となる。

具体的には、展示替え検討（キャプション、民俗、クイズの3チーム）、クイズラリー、学習カード作製、紙芝居上演、ふるさといろはかるた作り、情報発信、イベント補助、学習資料展がある。

展示替え検討については多少わかりにくいので、3つのチームについて説明を加えておく。「キャプション」は常設展示室のキャプション改善、「民俗」は民俗資料活用としてミニ展示を行い、「クイズ」は来館者がより展示に親しむためのクイズを設置している。

こうした中で、学習資料展は、小・中学校の学習に役立ててもらうために毎年開催し、昔の生活道具や家電製品などを紹介している。

また、月に一度、市民学芸員全員が集まり、定例会が開催される。ここではそれぞれの市民学芸員が活動の進捗状況を報告し、お互い情報の共有を図ることになっている。

3. 学習資料展の概要とコロナ禍での対応

学習資料展の開催は、令和3年度で17回目となる。市民学芸員が担当学芸員とともに、企画、展示資料検討・選定、展示のジオラマ制作、展示準備、会期中イベント、展示片付けなどに大きく携わっている。

毎年5月から開催月まで、月に1回、担当学芸員と市民学芸員の中の学習資料展チームのメンバーが、準備会と呼称する事前のミーティングを行うために集まり、その内容を決めている。例年「ちょっと昔の暮らし」という大テーマは保持しつつ、回ごとにテーマを変えて行っている。

学習資料展では、毎年共通で行っていることがある。それは、①ジオラマ作成、②チャレンジ体験、③展示解説、④思い出掲示板の4つである。

①ジオラマ作成は、資料をただ並べて展示するだけでなく、居間や台所などのジオラマ制作による再現展示をしている。

②チャレンジ体験は、会期中の第1、3日曜日に開催している関連イベントである。ブンブンごま、割り箸鉄砲などの昔あそびや、石臼、薬研などの道具の体験を市民学芸員が指導しながら来館者に楽しんでもらう。また、当日は時間を決めて昔ながらの雰囲気で行う紙芝居や、市民学芸員制作の「ふるさといろはかるた」大会なども合わせて行っている。

③展示解説は希望すれば、市民学芸員による展示解説を行うものである。

そして、④思い出掲示板では、来館者が書いた感想などを貼り出している。これはほぼ毎日更新している。

しかし、新型コロナウイルス感染症の流行により、例年通りに①から④をすべて実行することはできなくなった。飛沫感染や接触感染、3密の回避といった基本的な感染防止対策を考慮した結果、①ジオラマ作成と④思い出掲示板は継続することになり、③展示解説は中止となった。さらに②チャレンジ体験は、来館者が体験することができない代わりとして、道具の使い方を説明した動画を制作し上映する形式に変更した。

4. 令和2年度の学習資料展（準備会）

以下では、具体的に令和2年度の12月1日から1月31日まで開催された学習資料展について、準備会から実際の展示までの流れを報告する。

第一回準備会は通常より三か月遅い8月に開かれた。この時間的な遅れを補うため、担当学芸員が方向性を事前に決めておき、それを市民学芸員と調整していくことで議事を進めた。

その結果として、令和2年度のテーマは、『今』を主軸に道具からどのように生活が変化したかを見ていくこと』とした。

これはコロナ禍で人口に膾炙した「新しい生活様式」を独自のキーワードにし、そこからいくつか象徴する言葉を抽出し、掘り下げる形で、展開することとなった。そこで決定されたのが食、衣、情報・通信、買い物、であった。学習資料展では、これらに関連する道具の変化を紹介することとした。

その際、各々の道具について市民学芸員から自身の体験を「思い出エピソード」として募り、資料と一緒に掲示することになった。

博物館では、感染症拡大を防ぐために、来館者同士の間隔を2メートル開けて鑑賞することが推奨されていた（注2）。そのため企画段階では資料の配置間隔の確保を考えており、思い出エピソードのパネルを掲示することにより、資料の配置間隔を違和感のない形で確保しようとした意図があった。

また調査という視点から見ても、思い出エピソードの募集は意義のあるものである。前述の通り、市民学芸員の年齢層は退職後の世代が多く、それは家電が生活に普及し始めた昭和30年代から40年代にかけて、子どもの頃に体験している世代である。当時は実際にそれを体験した相模原市民のまとまった記録は作られていないようである。

こうした家庭における変化は語られずに消えてしまうことが多いが、残すべき貴重な情報だと考えた。事例を収集することにより、家庭での家電の位置付けや、生活

コロナ禍における市民協働の実施についてー学習資料展の新たな試みを例にー

の変化の記録として残すことになる。生活史の資料として大変貴重なものになると思われた。

ただ、この思い出エピソードについては、以前から構想があった。というのも、筆者は以前勤めていた博物館において、似たような試みを行った経験があったからだ（注3）。

概要だけ説明しよう。まず筆者たちは地域の広報紙を通じて資料の借用の呼び掛けを行った。これには80名以上の反応があり350点以上の資料が集まった。そして資料を借用する際に、それに関するエピソードを聞き書き調査し、企画展に落とし込んだのである。

なお、その際の展示では、同一のものを複数の所有者から借りた場合、資料のキャプションには資料提供者の氏名を連名にせず、その所蔵者名のみ記載した。それは提供資料が所蔵者の個人的な思い出と繋がっていることを重視し、たとえものとしては同じでも所蔵者が異なれば、それらが持つ主観的な価値（所蔵者の「想い」と換言してもよい）も異なると考えたからである。つまり、資料歴が異なれば、同じものでも異なる資料であるということを示したのだ。

しかし一方で、今回は館蔵資料を展示するため、展示している資料そのもののエピソードではない（このことは課題として後述する）。あくまで市民学芸員が館蔵資料と同じようなものを使用していた頃の記憶を募集したものであり、そうした意味では上記の試みとはいささか性質が異なっている。

また、これは副産物的なことであつたが、市民学芸員から思い出エピソードを募ることは、奇しくも以前から市民学芸員の中で問題となっていたことを解決する一つの道筋を与えてくれた。

以前から市民学芸員の問題として、参加者の固定化が挙げられていた。登録人数は50人以上いるものの、積極的に参加する人数が少ないため、参加するメンバーの負担が大きくなっており、より多くの市民学芸員が参加しやすい体制を築き上げる必要性を感じていた。今回の思い出エピソードに関しては、自宅にいながらにして企画に参加することができ、普段はなかなか参加できないメンバーも容易に関わることができるようになった。

当初は集まったエピソードから資料を選定し、展示ストーリーとシナリオを検討しようと考えていた。しかし、実際は展示ストーリーとシナリオから展示資料を選定し、資料リストの中からエピソードを記してもらうことになった。

第一回目の準備会で出た意見としては、次のようなものがあつた。

- ・集まったエピソードの資料に偏りが生じるのではないかな。
- ・偏りはそれだけその道具の影響が大きかったという証左なので偏ってもいいのではないかな。
- ・一人2つ以上書いて貰ったらどうか。
- ・文字ばかりの展示になるので、展示方法に工夫が必要だ。
- ・文字数は400文字が限界ではないかな。

しかし、実際には400文字でもその文字数のキャプションが並んでいる展示は、来館者に読む気をなくさせることが容易に想像できた。一方で書き手のことを考えると、400文字ほどないと、そのエピソードの良さは出ない。結果として、エピソードは400文字で募集することになった。

第二回準備会は一回目の一週間後に開催された。その時に出了意見として、エピソードの偏りが出ないように、資料リストを元に誰がどの資料のエピソードを書くか担当を決めたらどうかというものと、実際集まったエピソードを確認した後、エピソードの少ない資料について再募集をかけたかどうか、というものがあつた。

また集まったエピソードは、9月の定例会（前述の通り月に1回行われる市民学芸員全員を対象とする会）で募集、10月の定例会を〆切にすることが決まった。その際募集用紙には例文を載せることになった。

第三回の準備会は、定例会前の9月に行われ、募集用紙にはそのエピソードがあつた年代（年齢ではない）、場所、性別を明記してもらうこととした。

準備会は第6回まで開催され（第四回9月半ば、五回10月半ば、六回11月半ば）、ここでは集まったエピソードの確認が行われた。表1を見ても明らかのように、エピソード時の居住地をみると、相模原育ちの人よりも、様々な地域から移住している人が多いことがわかる。

5. 令和2年度の学習資料展（展示）

10月の定例会までに集まったエピソードは、11月の定例会までに、担当学芸員の手でデータ化され、400字ほどの文面は100文字程度の短文に編集された。その上で、11月の定例会にて、書き手の市民学芸員が内容を確認し、修正を施したのち、パネル化した。

思い出エピソードのパネルには、資料名、エピソード、エピソード時の居住地域、時代、現在の年齢、性別を記した。パネルはA3サイズで、資料を「解説」したキャプションとは別であることを示すために、下地の色を薄

い赤や青などにし吹き出しをイメージした円の中に書き出した。また、短文化する際にはストーリーの核となる部分をなるべく残し、原文の個性を消さないようにした。

このように準備をして行われた学習資料展であったが、令和2年度の展示は新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって、会期中中で博物館が臨時休館となり、終了することになった。

6. 令和3年度の学習資料展

前年度の展示が会期中中で終了したため、令和3年度も展示資料やテーマをあまり変えずに展示を行うことになった。

ただし、展示スペースの拡大や他のボランティアグループと共催するなどの事情もあり、資料数は増えた。ストーリー展開も前年度とは異なるものになっている。

また、昔遊びを体験してもらうチャレンジ体験は、新たな方法で実施した。ブンブンごまの作り方・遊び方の動画を作成し、家で作って遊べるよう「ブンブンごま作成キット」を作成し配布を行った。これらの取り組みも機会を改めていずれ紹介するつもりである。

「思い出エピソード」については、引き続き行うこととし、令和2年度のように何度も準備会で検討するのではなく、第一回の準備会で大筋の内容を確認し、新しい資料リストをもとに思い出エピソードを再度募集することになった。

7. 思い出エピソードの成果

さて、令和2年度、3年度の学習資料展を終えて、思い出エピソードを導入した成果について述べていきたい。

学習資料展では来館者へのアンケートを行い、展示に関する感想を得る一つ的手段としていた。その中で思い出エピソードについては、以下のようなものがあつた。

- ・昔の人がどんな暮らしを想像する手助けになった。
- ・自身の持っている思い出を思い出した。
- ・資料ひとつひとつに人の思いがたくさん詰まっていたことが分かった。
- ・やっと歴史に興味のでる年齢になったが、祖父母は亡くなってしまい昔の“生きたエピソード”を本人から聞くことはできなく、もどかしく感じている。ここで年配の方の話を聞いて感動した。

これらは一部であるが、おおむね来館者からは好意的な感想を得ることができた。また、アンケートではなく封書にて、「一つ一つに思い出が詰まっているよう」と、

冷蔵庫などいくつかの資料について、自身の思い出を書いて送ってくださった方もいた。

こうした反応から、思い出エピソードの掲示は、観る人の記憶を触発し、また実際に経験していない人も含めて、展示資料と来館者を繋ぐ役割を担ったことが示されたといえるのではないだろうか。

では、実際に展示された思い出エピソードの内容についてどのような傾向が見られたのだろうか。

前述の通り、思い出エピソードは市民学芸員の過去の体験であり、必ずしも相模原市におけるものではない。多くが幼少期や若年期を過ごした他の地域での体験であり、思い出エピソードから相模原市の地域性を読み解くことはできなかった。

事前にある程度予測した通り、思い出エピソードの内容は、自身が子供だった頃の家電についても多かった。ただ、比較的早く普及した電気炊飯器などの調理に使う家電についてのものは少なかった。

準備会でも意見が上がったが、やはり実際にエピソードを募集すると、選択される資料には偏りが生じた。目立って多かったのは、ラジオやテレビなど、子ども時代の娯楽に関する道具である。従って、市民学芸員の記憶の中で楽しい思い出が大きな印象として残っていることが窺えた。

次に多かったのが、謄写版に関するエピソードである。書かれたエピソードがすべて苦労した思い出で、謄写版が身近な道具であった分、大変な思いも沢山いただろうと想像される。これは一見すると娯楽に関する道具の思い出と対照的に感じるかもしれない。しかし、実際の文章からは謄写版に対する懐かしさや愛情が伝わってきて、単なる苦労話ではないことがわかる。

加えて、市民学芸員ではなく、来館者アンケートでも70代以上の方が何人か謄写版について自身の思い出を書いている。謄写版からタイプライター、ワープロ、パソコンとその変化を実体験している世代が今70代であり、彼らにとっては非常に思い出深いものであることが発見できた。

思い出エピソードでは、自分の家庭では、道具を本来の使用法とは異なる用途で使ったというものもあった。具体的には、絞り機付き洗濯機を使い、歯磨き粉を最後まで使うためチューブを絞り出すというものである。こうした話はなかなか聞く機会がなく、表に出て来ないで埋もれてしまう可能性が高い。

今回、思い出エピソードを導入したことは、コロナ禍における市民協働の展示をなんとか成立させるための工夫であった。しかし、これによって、それぞれの展示資

料が日常生活の中にあった時の空気感を伝えることができ、単純に感染症予防のための変更ということ以上の成果をもたらすことができた。

思い出エピソードの作成は、市民学芸員への調査というだけではなく、来館者が新たな知見を得たり、過去へと思いを馳せる契機となり、そこから自己と展示の結びつきを見つけたり、それ自体が一つの資料としての意味を持ったと考えられる。だとするならば、今回の試みは市民と協働で新たな資料を作ったということになるのではないだろうか。

おわりに

最後に、新型コロナウイルス感染症の流行する中での学習資料展において見えてきた課題について述べておきたい。そこにはコロナ禍ならではの課題だけではなく、非常時だからこそ明瞭になった市民学芸員の課題や学習資料展そのものにおける課題も見つかった。

はじめにコロナ禍における課題である。今回、新型コロナウイルスの感染予防のために、来館者が直接昔あそびや道具の使用を体験することができなかった。また、市民学芸員による展示解説も中止となった。

代替案として映像の上映やキットの配布などはあったものの、やはり市民学芸員と来館者が直接交流し、学びの場をともに形成するような従来の方法とは理解の度合いが異なってしまう。感染症を予防しながらも、来館者が主体的に学べる方法を模索していくことは今後の課題となるだろう。

次に、市民学芸員そのものについての課題がある。前述の通り、そもそも市民学芸員の抱える問題として、参加者の固定化・少人数化があった。これにより、積極的に参加しているメンバーの負担が大きくなり、事業を行うのが困難になっていく可能性がある。今回は思い出エピソードという方法で参加者をより多く募ることができた。展示終了後に市民学芸員へ行ったアンケートでも「市民学芸員一人一人の体験がパネルで展示されて良かった」と評価する声が聞かれた。しかしながら、コロナ禍ではなくとももっと多くの市民学芸員が活動に関われるような方法を考えていく必要があるだろうし、また市民学芸員の「やりがい」についても考えていかなければならないだろう。

初めに記した市民学芸員のチームから分かるように、多くの市民学芸員は博物館と来館者を繋ぐ人対人のコミュニケーションの喜びをその原動力としている。今回の思い出エピソードの取り組みは、たとえ後日来館者からの感想を伝えたとしても、間接的なコミュニケーション

に変わりなく、市民学芸員が望む「やりがい」を得られるものなのかは疑問が残る。

それから、思い出エピソードそのものについての課題である。前述したが今回の思い出エピソードは、展示資料そのもののエピソードではない。あくまで同じ道具を使用していた市民学芸員の思い出を文章化したものだ。しかし、読み手に目の前の資料そのもののエピソードだと誤解させる可能性はある。実際の展示では、一つの資料に対し、複数人の複数のエピソードを紹介することで解決策を試みたが、やはりまぎらわしいことに違いはないだろう。

また、書き手が勘違いして、誤った情報が書かれている可能性があることも考慮しなければならない。こちらでも対策として書き手の情報をパネルに記載して、個人のエピソードであることを強調した。今後は民俗学におけるライフヒストリーの重要性を踏まえた上で、個人の記憶と客観的事実の提示のバランスについてはもう少し考えていく必要がある。

このように、今後の課題といっても、様々な位相に重層的に存在していることがわかる。それらをひとつひとつ整理した上で、どのような状況下でも市民と協働で活動していく方法を見つけ出し、ともに挑戦していくことがこれからも求められていくだろう。

注

(1) 相模原市立博物館でも令和 2 年度の学習資料展で一部新型コロナウイルス感染症関連の資料の展示を行った。

(2) 日本博物館協会「博物館における新型コロナウイルス感染拡大予防ガイドライン」には、「来館者同士の距離を確保すること（最低 1 メートル、できるだけ 2 メートルを目安に）」とある。

(3) 杉並区立郷土博物館で平成 26 年度 9 月 20 日から 2 月 7 日に開催された『東京オリンピック・パラリンピック 50 周年記念 杉並区立郷土博物館分館企画展 1964 東京オリンピックと杉並』にて実施。

参考文献

- 小野譲史「分科会 1「コロナ禍の下での博物館の取組」に参加して」『神奈川県博物館協会会報』第 92 号 2021
- 金子淳「昭和ノスタルジー」という思い出『歴博』第 152 号 2009
- 木村弘樹「常設展示室 近世～近代史料コーナーのキャプションの改善について～市民学芸員「展示替え検討

会 解説パネル検討班」との協働～」『研究報告』第 25 集 2017

木村弘樹・畠山義道「『市民学芸員』と共同企画運営による企画展紹介」『神奈川県博物館協会会報』第 90 号 2019

木村弘樹・市民学芸員かるた作りチーム「博物館ボランティア『市民学芸員』制作の『相模原ふるさといろはかるた』について」『研究報告』第 27 集 2019

相模原市立博物館『令和 2 年度 相模原市立博物館年報』2021

齊藤有里加「東京農工大学科学博物館における展示と資料のデジタル化公開」公益財団法人 たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第 182 号 2021

佐藤智敬「コロナ禍に可能な博物館活動を求めて—府中市郷土の森博物館の場合—」公益財団法人 たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第 182 号 2021

佐藤優香「思い出がもたらす博物館・利用者・社会のコミュニケーション」『歴博』第 152 号 2009

杉並区立郷土博物館分館『東京オリンピック・パラリンピック 50 周年記念 杉並区立郷土博物館分館企画展 1964 東京オリンピックと杉並 パンフレット』2014

青海伸一「福生市郷土資料室における新型コロナウイルス関連資料の収集と展示」公益財団法人 たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第 182 号 2021

仙仁徑「植物観察会での『ゆるやかな』ウェブの活用—パルテノン多摩の事例—」公益財団法人 たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第 182 号 2021

丹治雄一「分科会 2『コロナ時代の新しい博物館像』に参加して」『神奈川県博物館協会会報』第 92 号 2021

野島久雄「個人の思い出から社会の思い出へ—思い出の心理学と博物館—」『歴博』第 152 号 2009

菱沼沙織「深大寺の文化財活用—元三大師像を中心に—」公益財団法人 たましん地域文化財団『多摩のあゆみ』第 182 号 2021

平能克泰「博物館のボランティア～展示活動協力員から市民学芸員へ～」『研究報告』18 集 2009



写真 「思い出エピソード」掲示の様子
(令和 2 年度学習資料展)

コロナ禍における市民協働の実施について－学習資料展の新たな試みを例に－

令和2～3年度学習資料展 思い出エピソード(五十音順)

	資料名	エピソード	要約	年代	場所	現在の年齢	性別
1	ウォークマン	ソニーのウォークマンを買いました。今でいうと、ブックオフで物を買う感覚です。質屋で手に入れたせいとか、すぐ壊れてしまいましたが、ウォークマンの、二ホンザルが、音楽に魅き入っているのが秀逸だと思いました。	ソニーのウォークマンを買いました。質屋で手に入れたせいか、すぐ壊れてしまいましたが、ウォークマンの、二ホンザルが、音楽に魅き入っているのが秀逸だと思いました。	1970年代	横浜市	50代	女
2	カメラ	高校3年から丹沢、奥多摩へと登山に出掛けるようになった。写真（弱オバウ）でアルバムをして、小型カメラ、オリンパスを買った。このカメラは2枚撮りでも倍の48枚以上写せたので、3〜4回登山しなれば写し終えなかった。当時は写した写真は大切にアルバムに貼った。今、アルバムをめくると古ぼけた白黒写真か青春の痛みや喜びが昨日の日のことのように思い出される。	高校3年から丹沢、奥多摩へと登山に出掛けるようになった。写真を握りたくなって、大学1年の夏休み、小原光48枚（弱オバウ）でアルバムをして、小型カメラ、オリンパスを買った。このカメラは2枚撮りでも倍の48枚以上写せたので、3〜4回登山しなれば写し終えなかった。当時は写した写真は大切にアルバムに貼った。今、アルバムをめくると古ぼけた白黒写真か青春の痛みや喜びが昨日の日のことのように思い出される。	1970年代	緑区 橋本	70歳代	男
3	蚊帳	今、感染症で大変です。60年前ごろです。夜、蚊帳を吊り、寝るのが好きだったので、寄せ金いになるので、楽しく寝ました。その蚊帳が、9月13日のテレビで三大感染症マリアリアの死者数に大きく貢献している。古い物が新しく貢献。とても良かったです。	夜、蚊帳を吊り、寝るのが好きだったので、寄せ金いになるので、楽しく兄弟、姉と寝ました。	60年前頃		70歳代	女
4	蚊帳	小学生の頃、夏には蚊帳を吊って寝ていました。蚊取り線香はもともと一箱に蚊帳の中で寝ていました。現在よりも蚊が多く、寝ているとブーンと音がして、刺されると痛々しい思い出でした。	小学生の頃、夏には蚊帳を吊って寝ていました。蚊取り線香はもともと一箱に蚊帳の中で寝ていました。	1950年代?	川崎市	70歳代	女
5	絵本	おにぎりなどの不審事件が多すぎて、薄く削ったもの、Wikipediaの資料から、日本では大和時代から使われてきた包巻材ですが、近年はビニール袋の普及により、使用率が激減。しかし通気性や殺菌性に優れている。使用後は焼却処理が必要で、バイオマス利用ができ環境に優しいという点で再び脚光を浴びています。おにぎりを包むと海苔がべつべつと食味も良く、食べられる天ぷら等の揚げ物をする時、揚げたてを食べると油をよく吸収し、力が入る。肉、魚の冷凍のものでも解凍するとき、解凍したてのものを冷凍するとき、美味しく食べれる。今でも上流の和菓子屋さんでは絵本に入れてくれる店があります。	おにぎりに包むと海苔がべつべつかず風味も良く食べられる。天ぷら等の揚げ物をする時、揚げたてを食べると油をよく吸収し、力が入る。肉、魚の冷凍のものでも解凍するとき、解凍したてのものを冷凍するとき、美味しく食べれる。今でも上流の和菓子屋さんでは絵本に入れてくれる店があります。	70歳代		70歳代	女
6	クレジットカード	正確には覚えていませんが、私はごく初期からクレジットカードを利用していています。とにかく小銭をジャラジャラ持っていると嫌なので。独身時代はスーパーに行くても、¥1K以上になるとクレジットでした。当時は対応している店も少なく、また対応しなれど、スタタツのお客さんや後ろのお客さんから様子さんかと思ひます。もう50年近く経っているのですが、キャッシュレス化についてはいないよう思ひます。	正確には覚えていませんが、私はごく初期からクレジットカードを利用していています。当時は対応している店も少なく、また対応しなれど、スタタツのお客さんや後ろのお客さんから様子さんかと思ひます。	1970年代		60歳代	男
7	蛍光灯	我が家に初めて蛍光灯が付いた日の事であった。父親がおもむろに蛍光灯のスイッチのヒモを引くと、最初ボヤリと来り、やがてまぶしい白い光が部屋を照らした。今までの電球と違う輝きに感動した。初期の頃の蛍光灯は明るくなるまでに、ひと呼吸時間を経る必要である。その時から、やや反逆的に面白い友人は「蛍光灯」という名前を呼ばれていた。いつの間にか気が付いたら、スイッチを入れてすぐに点灯する蛍光灯に改良されていた。そして今はLED電球が多い。あたかも変わるかもしれない。	最初に蛍光灯が付いた日、家族全員が呆つめる中、父親がスイッチのヒモを引くと、最初ボヤリと来り、やがてまぶしい白い光が部屋を照らした。今までの電球と違う輝きに感動した。初期の頃の蛍光灯は明るくなるまでに、ひと呼吸時間を経る必要である。その時から、やや反逆的に面白い友人は「蛍光灯」という名前を呼ばれていた。いつの間にか気が付いたら、スイッチを入れてすぐに点灯する蛍光灯に改良されていた。そして今はLED電球が多い。あたかも変わるかもしれない。	昭和30年代はじめ頃	北海道	70歳代	男
8	計算尺・タイガー・手回し計算機	46年当時市内の機械メーカーに入り、技術部に配属され機械設計を担当しました。設計業務の始めは図面を書くことで、これには多くの技術計算が必要で、ソロバンは勿論のこと掛け算・割り算に計算尺を多用していました。このころは学校で習っていた計算機による計算は、金額の計算や精密な技術計算を必要とする場合にタイガー・手回し計算機によって行っていました。ただこれを扱うのはわずかの限られた人になっていった。時々から電車やコンビューアの時代に乗りこみ、やがて計算尺も手回し計算機もお目見えになりました。ただ手回し計算機のクラウンを回すときの「チャリン、チャリン」音は特別にいい耳に残っています。	当時市内の機械メーカーに入り、機械設計を担当しました。設計業務の始めは図面を書くことで、これには多くの技術計算が必要で、ソロバンは勿論のこと掛け算・割り算に計算尺を多用していました。このころは学校で習っていた計算機による計算は、金額の計算や精密な技術計算を必要とする場合にタイガー・手回し計算機によって行っていました。ただこれを扱うのはわずかの限られた人になっていった。時々から電車やコンビューアの時代に乗りこみ、やがて計算尺も手回し計算機もお目見えになりました。ただ手回し計算機のクラウンを回すときの「チャリン、チャリン」音は特別にいい耳に残っています。	昭和40年代	相模原市	70歳代	男
9	計算尺～(関数)電卓	中学1年生の時に計算尺に興味を持ちました。計算のできる不思議な物差し？楽しんでいろいろうちに繰も取得しました。やがて社会に出て設計業務に就き、当初は「得意な？」計算尺で設計をしていました。その後、高額の関数電卓が登場し、設計ツールは一挙にそちらへ移っていききました。(当時は高額なため会社商品として購入入。)	中学1年生の時に計算尺に興味を持ちました。楽しんでいろいろうちに繰も取得しました。やがて社会に出て設計業務に就き、当初は「得意な？」計算尺で設計をしていました。			60歳代	男
10	氷冷蔵庫	夏になるとどこからか2ドアの氷冷蔵庫が登場！12ドアと言っても、上は保冷用の氷の為のスペース。下のドアが食料収納スペースでした。水廻りの水の切れるシャリシャリという音、氷が冷蔵庫に入るやいなや取り出して、兄、姉と共に割って楽しむ夏の思い出です。(食品が乾燥しないので、今でも弟お爺さんなどで使っているそうです。)	夏になるとどこからか2ドアの氷冷蔵庫が登場！！氷が冷蔵庫に入るやいなや取り出して、兄、姉と共に割って楽しむ夏の思い出です。	50年+α前	東京都品川区	60歳代	女

コロナ禍における市民協働の実施について－学習資料展の新たな試みを例に－

[illegible]

コロナ禍における市民協働の実施について－学習資料展の新たな試みを例に－

40	種	私が幼い頃、日用雑貨店を営んでいた家には、ばね秤や分銅で目上皿の付いたばね秤には、毎年検査に合格した証しとしてシールが貼ってありました。	昭和38年頃	福島県	60歳代	女
41	天秤かりと計算尺	実家は家族で和菓子製造販売業を営んでいました。田舎ですが、和菓子のショーケースより広いスペースで煎餅、落花生、甘納豆など50種類のお菓子を詰り売っていました。お菓様の要求金額に応じて玉類ばかりを使用し袋に入れて販売する訳です。ある時、父親が以前から天秤ばかりの横に置いてあった30用紙位のものを動かしながら天秤が重さ加えていました。価格改定で換算表を書き換えたので、私も小学校高学年になると店番の時などその表を使いました。私が、最初の頃お客様に半端の金額を言われると困りました。	昭和30年頃 (1960)	静岡県 富士宮市	70歳代	男
42	量り売り	私が小学生くらいの頃（昭和30年代末）は地元のお店が多くて食料品が量り売りされていた。豆腐は、小さな鍋を持って買いに行かされた。ニンジン、ジャガイモ、玉ネギなどは、店手作りの、新聞紙で作った紙袋に入れてもらった。	昭和30年代 はじめ頃	北海道	70歳代	男
43	張り板	近所のお婆さんが張り板を使わせて下さいと言って来ましたが、張り板が枚数ありました。家には母が嫁入り道具として持ってきた長方形の濡れた着物をびったりと何枚も板に張り付けて、乾いた頃に又やってきて剥がして焼くってしました。	昭和40年代 はじめ頃	福島県	60歳代	女
44	二つ折り携帯電話	職務上持たないわけにはいかなかったもので、いわゆるガラケーを購入したのですがスマホには不便で小型軽量、フル充電すれば一週間はもちます。	平成25年	相模原市 緑区	60歳代	男
45	二つ折り携帯電話	家の電話で十分…と思っていたんですが、子どもの幼稚園で役員に家との連絡はメールで行えるのを便利だと聞いて、自分用の携帯電話を持つようになりました。	2005年頃	相模原市	50歳代	女
46	足踏みミシン	中学生時代、家庭科の授業でブラウスなどを縫ったことを思い出しました。メーカーによって特徴があり、ミシン糸を針に通すのもずかしいと思いながら楽しく縫い方を習いました。	1950～60年代？	川崎市	70歳代	女
47	足踏みミシン	私の祖母は洋裁学校の第1期生。一早く足踏みミシンを購入して、洋服を、洋服を縫っていました。そして、戦時中の食糧難も近所の人の着物を洋服に縫い直ししてあげたりして乗り切ったそうです。その頃の母は、お嫁入り道具の足踏みの縫い直しで私の洋服を縫ってくれました。スタイブルブックの中の素敵なドレス、それが実物と違ってミシンは素敵な縫い方でした。今は動力ミシンに代わりましたが、いまだに私の服を縫ってくれる私にとって足踏みミシンと違い、動力ミシンは自由で楽だとか。足踏みミシンはまだ使えるそうですが、今は実家の物置で眠っています。				女

48	ミシン	昭和54年ミシンを買った。ジャノメモリアコンターナーミシン。19万8千円。母が使っていた足踏みミシンはどうしても上手く使えなかった。ゆっくり進めたり止めたり。曲線を縫ったりの縫いゴツが難しかった。就職してからミシンを買った！高かった！約2か月分のお給料！でも遅くなかった！複数のスチッチやボタンの穴かがりがりが出来。曲線もゆっくり縫える。何でも好きな物が作れると思っ購入した。職員旅行で同期の友人とお揃いのワンピースを作り、ピンクレディテーマドレスを縫った懐かしい思い出(笑)。それから子どもの通園バック教を作った以来、何年過ぎたかな？今年押し入れから久しぶり出した。新型コロナウイルスのおかげでマスク作りに活用している。	昭和50年代	東京都 町田市	60歳代	女
49	真空管ラジオ	私は、小学校入学(昭和29年)前後の幼少期、ラジオを聴くのが楽しかったです。当時は木製のキャビネットにネット張りの真空管ラジオで、電源を入れてから真空管が温まるまで多少の時間がかかり、アンテナ線を動かしながらダイヤルで選局するものでした。下校後の屋のひと時、NHKの「ひるのいこい」から流れるテーマ曲(古関裕而作曲)とともに「〇〇県農林水産通信員のへ、」を聞き、まったりしたものです。夕方にはNHKの「笹吹童子」、(「紅孔雀」、ラジオ東京(TBS)の「赤胴鈴之助」、又渋い浪曲、談話、落語等も聞き取らうと耳を傾けましたが、その後、トランジスタラジオやテレビが普及し間がなくなりました。このラジオは伊勢湾台風で水没、プラスチック製に買い換えられましたが、いまだ押入れの奥に眠っています。	昭和30年代 前半	三重県 桑名市	70歳代	男
50	真空管ラジオ	テレビなどない時代で唯一の楽しみは、ラジオから流れてくる連続時代劇物語「紅孔雀」「赤胴鈴之助」「笹吹童子」「三つの歌」そして「NHK自慢」などの歌番組であった。当時のラジオは、放送局から遠いため雑音が多く、モノラル放送で音も風くは無かったが家族全員で真剣に聞き入ったものである。	昭和20年代 ～30年代初 め	北海道	70歳代	男
51	真空管ラジオ	中学生当時、ラジオを自作することが流行っていて、これには「ラジオの製作」という雑誌によっていました。博物館資料の真空管ラジオは木製のケースで、わが方はケース無しのシャーシむき出しでした。展示のラジオを見ると、ケースの内蔵を見なくなり、真空管の配置を見て着て思い出したりしています。ただ、内部はなかなか壊れかかっており、機会があれば掃除してやりたい気分です。しかしながら動作できるまでの修理は難しいと思われます。	昭和30年代	香川県	70歳代	男
52	トランジスタラジオ	50年ほど前、数年前のお年玉を貯めて、トランジスタラジオを購入。深夜放送を聞いた頃を思い出しました。	50年ほど前	横浜 市 戸塚区	60歳代	
53	トランジスタラジオ	父と街の電気屋さんに行った時SONYのトランジスタラジオがジョウウインドウトにありました。購入すれば子供用のゴムボートがおまけに付いてくるというのです。新し物好きであった父はボートは子供たちも喜ぶだろうとラジオを購入しました。母は音源だったのでも少し嫌嫌が買ったことを覚えてます。後から聞くところによると当時の初任給くらいに値がったとが。	1960年代	長野県	60代	女
54	トランジスタラジオ	私がお心ついた頃のラジオといえば、田舎に住む祖母宅の居間で存在感を放っていた、一斗缶ほどあるつまみの大きな「真空管ラジオ」でした。もちろん私の家では、祖父が井当箱ほどの「トランジスタラジオ」で株式市場を聴いていたので、コンパクトな製品があることも認識していました。父が買ってきた「トランジスタラジオ」をいつのまにか自分占有にして、試験勉強させて青春多感な時期になると、父が買ってきた「トランジスタラジオ」をいつのまにか自分占有にして、試験勉強をせしめ夜更かしが次第に増えていき、深夜放送からの寝静なトークが、毎晩夜更けの部屋を満たしてくれました。土曜の夜だと「桂三持のヤングタウン東京」が定番で、続いては「山口百恵のモモモ30分」や「アグネス・チャップマンのヤングポップス」、そのあとは「中村メイコのロストラブ」という、女性が初体験から失恋までを投稿告白する番組があったりして、毎週ドキドキして聴いていたのを覚えています。最後は「オールナイトニッポン」を聴きながら、眠りに落ちるのが常でした。	1970年代	相模原 市内	60歳代	男
55	レジ袋 (買い物か ご)	子どもの頃、買い物かごを顔にした母とよく歩いて買い物に出かけました。行先はスーパーマーケットではなく公設市場です。小売店が入り口から出口までずっと並んでいて、1周すると夕飯の材料が揃います。卵屋さんは卵1個1個を電球に透かして食品しながら紙の袋に入れてくれます。お豆腐屋さんも、袋通直売です。重なり売りが多かったのですが、私はその日のおやつをガラスケースの中に入ったりのお菓子やどりのお菓子が選べるのが楽しかったです。お店の人の会話をとても楽しかったです。空っぽの買い物かごをいっぱいにして帰ります。今思えば、買い物かごは小さかったなと思いますが、その頃は、まとめ買いではなく、たびたび買い物に行っていたように思います。冷蔵庫も今ほど大きくありません。				女

56	ワープロ	私がまだ若輩で就職したばかりの頃は、書類の作成はペン書きでした。インク瓶に浸ける「付けペン」というやつで、時には「ガラスペン」なんて洒落たものも使っていましたが、私は字が下手なのがコンプレックスでした。そんな時、隣の職場のお姉さま方が「和文タイプライター」を操るのを見て、これなら自分の書いた文字をさらすこと無く、カチッとした書類を作成できると思い、夢中で教わって練習し、これでボロ隠しができると満足しておりました。ところが80年代半ばだったか、職場に「フジゼロッックスのワードプロセッサ」が配備され、約20cm四方の大きな「フロッピーディスク」を差し込み、作成した書類をデータ保存できること、またデータを修正して何度でも使い回せることに、至高の利便性を感じました。数年後には、より小型で持ち運び可能な「東芝のルボ」が配備されました。個人でも購入して、年貢次や子どもたちの命名書の作成にも役立ちました。	1980年代	相模原市内	60歳代	男
57	ワープロ	学生時代、課題レポートの提出は「ワープロで清書したもの」との指示が出た。当時、ワープロはまだ高額で学生には簡単に買えるものではなく、学校に備えてある教台を友人と一緒に順番待ちをしながら課題を作成していた。文字の大きさが指定され、用紙もA4サイズになった。当時の手書きのレポート用紙はB5サイズが一般的だったのだで、A4サイズはとて大きく感じ、指定の文字サイズが小さいので1枚がなかなか埋まらなかった。（手書きの頃は、書く内容が少ないときは文字を大きくして1枚を埋めていたのだ）この頃から、用紙のサイズがB5・B4サイズからA4サイズに変わってきたように感じます。今はA4サイズを大きいと感じなくなってしまうくらいです。	1980年代	富山県	50歳代	女

※空欄は未記入だったもの

